

P2-069

歯ブラシによる事故調査並びに事故予防
に対する保護者の意識調査

大畑 直子¹、中村 昭博¹、巢瀬 賢一²、
中村 朋美^{1,3}、中村 徳三^{1,3}、渡辺 幸嗣¹、
小野 義晃^{1,4}、渡部 茂¹

¹明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野、
²なかよし家族の歯医者さん、
³中村デンタルクリニック、
⁴わかば歯科医院

【緒言】

東京消防庁のデータ¹⁾では平成23年までの5年間に、歯ブラシ事故（以下事故）により救急車搬送された5歳以下の子どもは229人と報告されている。事故については防止策や保護者に対する啓発活動は少なく、保護者の事故に対する認識についても報告は少ない。今回、歯ブラシによる事故の現状と保護者の意識調査を行い、若干の知見を得たので報告する。

【方法】

明海大学歯学部付属病院小児歯科外来及び関連施設を受診した患児の保護者139名を対象として、過去の歯ブラシによる事故の経験、保護者の事故に対する認識の有無等についてアンケートを行った。

【結果】

1. 「事故を経験した者」は10名（7.2%）で、内訳は男児8名、女児2名であった。発生時の年齢は1歳時3名、2歳時3名、3, 4, 6, 7歳時が各1名で、原因は歩行中転倒が7名、壁・人との接触が3名であった。けがの程度は、粘膜切創・出血が7名（1名が歯の外傷を伴う）、嘔吐が1名、不明2名で、受傷後歯科医院等病院を受診した者は4名であった。2. 「事故に対する認識調査」では、1) 全体の77.7%が歯ブラシによって事故が起こりうることを認識していた。2) 92.1%が事故を心配したことがあった。3) 歯ブラシをくわえたまま動き回るとは56.1%が経験していた。4) 性別では男児に多いと考える保護者は44.6%で、最も危険な年齢は3歳時と考える保護者が40.3%、同様に2歳時が33.8%、1歳時が10.8%であった。5) 事故について具体的に注意していることは（複数回答）歯ブラシをくわえたまま歩かせない（136人）、子どもに歯ブラシを持たせない（25人）等であった。6) 歯ブラシを使い始めた年齢は1歳が最も多く54.7%、次いで0歳時が28.0%であった。

【考察】

母集団が少ないものの事故は7.2%と比較的高率にみられ、今後大規模調査の実施と事故予防対策を講じる必要性を感じた。1～2歳時に急増する歯の外傷と、原因、男女差等が類似していた。事故に対する保護者の意識は比較的高く、子どもに対する注意も行われていた。今後は歯科医師・歯科衛生士が積極的に支援することが必要と思われた。

【参考文献】

1) NHK生活情報ブログ2013/5/8 <http://www.nhk.or.jp/seikatsu-blog/200/154658.html> (2016年3.9. アクセス)

P2-070

挿管時等の歯と口腔の保護を啓発する活動
についての研究

宮新 美智世

東京医科歯科大学大学院 歯医学総合研究科 小児歯科学分野

全身麻酔時において多い偶発症として、歯が折れたり、揺れたり抜けることがあり、主に挿管時や麻酔覚醒時等に起き、挿管時に歯に加わる力は約148キログラムなどと報告されている（1）。また、口腔を介したチューブを使用する場合も舌等を損傷することあり、腫脹が生じ治療期間を延長させることがある。さらに、幼児の損傷は後で生える永久歯の形態異常を招くとの報告がある。これらを予防するために、全身麻酔前の歯科受診が推奨されており、マウスピースを作り装着することにより保護が図られてきた。これは確実な保護法だが、いまだ積極的に歯科受診が薦められるとは限らない。東京医科歯科大学小児歯科においては、あらゆる医療を受ける小児の口腔を健全に守ることを目標にしており、緊急時を含め歯科の事前受診が叶わない小児の口腔保護をめざした小児口腔保護用既成マウスピースを開発した（2）。しかし、このような医療現場における歯と口腔の保護活動に先立ち、まずは小児の口腔保護の必要性を広く周知する啓発活動が必要であるため、小児の周術期口腔管理の一環として、このたび全身麻酔や挿管を受ける可能性のある患児と保護者に対して歯科での口腔保護処置を薦めるパンフレットを製作した。そしてこの内容について検討することを目的に、医療者に意見を求めてその意識を解析し、パンフレットのありかたに考察を加えたので報告する。

資料は、東京医科歯科大学歯学部付属病院小児歯科外来において作成した、全身麻酔や挿管を受ける小児とその保護者向けの口腔保護処置を薦めるパンフレット；『医療と子どもの歯』である。医療者に目を通してもらった後、各自から感想と意見をインタビューし、回答等の記録答内容について質的研究（SCAT法）を用いて分析を行った。その結果、歯科医療者からは積極的な働きかけに対する期待が示された。また、小児の親自身も含む、すべての年齢層における一般的な入院や手術前の準備のひとつとして、口腔損傷に関する情報が広く定着して常識化することが支持されているとわかった。

参考：（1）加藤裕彦ら、喉頭展開が歯牙に及ぼす影響、日歯麻酔誌 2013;41（4）:198。（2）宮新美智世ら、挿管時等の小児口腔外傷に対する予防装置の研究、第14回日本外傷歯学会学術大会、2014.7. 26、大阪。